

# 知的障害高校生に対する単独移動支援プログラムにおける セルフ・モデリング教材の効果

○北村弥生

(国立障害者リハビリテーションセンター研究所)

KEY WORDS: 通勤、通学

## 【問題の所在と目的】

知的障害児・者にとっての地域社会での生活技能の一つに単独移動技能がある。通学や通勤を単独でできることは、学習時間を確保し、生活の幅を広げるために極めて重要である。なぜなら、通学でスクールバスを使うと下校時間が早くなり、午後の授業時間や課外活動の時間が短くなるからである。また、単独移動ができると就労先の選択肢が増えるからである。すでに、知的障害（児）者や自閉症（児）者を対象に、公共交通機関の利用を中心として、訓練室でのシミュレーションと現実場面での訓練により単独移動を可能にした研究成果は報告されている。また、行動療法の一つのセルフ・ビデオ・モニタリング技法では、過去の自分の活動をビデオ映像で視聴することにより場面理解の促進を行う試みも行われている。しかし、移動訓練の振り返りにセルフ・モデル教材を用いた例は見当たらない。本研究では、ひらがなの読みが可能な知的障害高校生1名に対し、自宅から研究施設まで約1Km程度の距離を単独移動することを目標として、現実場面で道順を記憶する訓練の後で目印の建物及び移動中の対象者自身の写真と対象者に理解可能な「経路説明文」から成るセルフ・モデル教材による振り返りを組み合わせた効果を示す。本研究で作成した「経路説明文」は、電子化してiPadやiPhoneのような携帯端末により移動中に参照することにより、移動中の経路間違いへの対処に応用することが期待される。

## 【方法】

対象者は、特別支援学校高等部1年に在籍する知的障害女子生徒1名であった。IQ50程度、療育手帳Bであり、小学校は普通学級、中学校は特殊学級を卒業した。セルフケアは自立していたが、時間管理と物品管理は母親の指示に従っていた。小学校の下校と中学校への通学を含めた移動の多くは母親が車で行き、高校通学にはスクールバスを使用し、移動支援事業などの社会資源を利用した経験はなかった。単独移動は自宅から約200mの距離にあるスーパーマーケットに限定されていた。

単独移動プログラムの目標は、対象者の自宅から最寄り駅まで約1Km程度の道のりの途中の目印20箇所を記憶することとし、同行者が確認した。また、目印の写真と解説文からなる「経路説明文」を支援者が作成し、対象者による「経路説明文」の音読と内容の確認を移動訓練の振り返りとして行った。学習プログラム実行中はビデオカメラとICレコーダーにより録音・録画を行い、プログラム終了後に読み速度と誤読頻度を計測し、回毎の変化を示した。「経路説明文」は、できるだけひらがなで記載し、漢字にはルビをふった。対象者は、ひらがなとカタカナ50音は読めたが、漢字の読みはほとんどできなかったことを事前に確認したためであった。

## 【結果】

目印20か所のうち、第一回目には場所と名称を確認できたのは1か所で、確認できなかった目印については何の建物かを理解していなかったため、歩行中及び「経路説明文」を読みながら、支援者が解説した。確認できた目印の数は、毎回増加し、最終回には18か所を確認できた。最後まで確認が不

確かだったのは「信号」2か所であった。

また、「経路説明文」の音読で逐語読みになったことから、読みに関する困難事象が7件、抽出された。1)西暦、2)24時間の時間表記、3)日付の読み方、4)「くらい」「まで」のような具体的事物でない言葉、5)使い慣れない言葉や表現、6)体言止め、7)「電信柱」のように学習する機会がないために習得していない具体的事物の名称。具体的事物の名称については実物との対応関係を示すことで容易に学習された。他は、対象者が理解できそうな語彙と表現に「経路説明文」を置き換えた。

「経路説明文」の音読時間と読み間違いの数を計測した結果、読み間違いの数は34から7に減少し、読み速度は1回目の39語/分から2回目の64語/分へ約2倍速くなった。

学校担任、特別支援コーディネーターからは、本プログラムは、ガイドヘルパーを伴った自律的な移動の第一歩と、高く評価された。対象者自身は、「経路説明文」を読むよりも童話を読むことを好み、母親は成果が具体的な活動に参加すること、次の目標や達成について対象者から自発的な報告が家庭でなされたことを歓迎した。

## 【考察】

当初の目的であった「道順の記憶」は、ほぼ達成されたが、日常的に歩行移動をしない対象者にとって、記憶が定着するか否かは、一定期間後に確認する必要がある。また、記憶を定着させるためにも、外出機会を習慣的に設定することも必要であると考え。図書館で行われる映画会、図書館での読書、課外活動などを外出機会候補として、ガイドヘルパーを同伴して、今後の試行課題とする予定である。

また、「経路説明文」を修正・補足することは、読み間違い数が減少し、読み速度が速くなっただけでなく、目印と行動の理解を確定し目印の確認数を増やすことに貢献したと推測された。3回目以降の読み速度の変化が少なかったのは、3回目以降には大きな文書の変更はなく、単語のいまわしの修正を行ったのみであったためであると考え。成人晴眼者の読み速度平均は350-700文字/分という報告と比較すると、対象者の読み速度の今後の変化も注目される。また、弱視者の読み速度に関する研究では、フォントの種類とサイズだけではなく、行間隔、用紙と文字の色、用紙サイズも読み速度に関係することが報告されていることから、「経路説明文」の体裁を修正することで読み速度が速くなる可能性もある。

「経路説明文」により目印の確認を強化しただけでなく、対象者が理解しやすい文章の特徴7項目を明らかにすることができた。知的障害児・者に読みやすい文に関しては、国際図書館連盟がガイドラインを出しているが日本語に対応したガイドラインはまだない。最近の研究では、ルビや時間表記についての指摘があるが、他にも一般化できる書き方があることと個別の対応が必要なことは、今回の経験でも示された。個々の経験を蓄積しガイドラインを作成することは有意義であると考え。

iPadやiPhoneに「経路説明文」を搭載することにより、移動行動が、より円滑になるかの検証は今後の課題である。